

# 謝々!! ジヤツキー先生!!

石川光

その日、"パートタイム"の仕事にあぶれて、神田橋の女子職業安定所からの帰り、いつものように神保町の書店街を歩いた、歩いた。角の本屋さんに入つて、文藝雑誌を開いた。全国同人雑誌賞!「女子大生・曲愛玲」!瀬戸内晴美。即ち、ジャッキー先生の記事と写真にお目にかかるた。えつ!?私と同じ徳島県!?訪ねて行つて、ようやくお会いできた……。

それから――

徳島が誇る今は亡き世界の大作家、宗教家、瀬戸内寂聴先生、怖れながら、ジャッキー先生と若かりし頃、練馬のご自宅で、ハリー・ベラフオンテのCDを聴いた。

デイーイオ デイーイオ  
コンビスタ タリバン タリニ  
バナーナ

ラムでものんで、待つていてね

“それ、エラヤツチャ! エラヤツチャ! ヨイ、ヨイ、ヨイ……”

私とジャッキー先生はカリブソのリズムにのつて、ふ・さとの阿波踊りを踊つた。踊つた……。

満開の桜！

徳島眉山の麓、「教室」？でなつかしいや・き餅をいただきながら、ポルトガルの文人、モラエスと、おヨネさま等の話をした……。

ずっと後になつて、ポルトガルを訪ねた夜、リスボアの酒場で、A・ロドリゲスの“暗いはしけ”？を現地の女性歌手が絶唱するのを聴いた……。

ジャッキー先生のおみやげに、CDを買つた。しかし、ついに、お届けする機会をのがしてしまつた……。

いつだつたか、あの頃、訪ねて行つたお邸の大きなお風呂に入らせてもらつた。“岡本かの子”を執筆の頃、だつたか？あまりに熱いお湯だつたので、思わず「イタイッ！イタイッ！」——とふるさとことばがでてしまい、叫んでしまつたのだつた。後になつて、ジャッキー先生は「あなたはトクシマの子だネ」とゲラゲラ笑つていたけ……。

お忙しいところ、懸賞小説にはずれた拙作をお読み下

さつて、わざわざ電話を下さつた。妻が夫の浮氣をなりふりかまわざ上司に訴える個所を挙げて、あの主人公の言動はミーハーだ。私だとあんな妻は、即、離婚する、と怒つているのだつた。小説の品を無くしているとも……。

「さよなら、H・Sさん」という小説、四百字詰め、八十枚を書いた。昭和三十年代のお世話になつたありがたいかかわり合い、青春の譜？を小説にしたものだつた。

群馬県の文学賞をいただいた。「現役の女性作家をモデルに描くことは、それだけに難しい問題が包蔵されていよう。如何に虚構を加えても、心のかぎりを描き切ることは難しく、突つこみが足りない、今一つ切り込んでもらいたかった」等、評された。

ジャッキー先生は、何もおつしやらなかつた。何も……。

名作「夏の終り」の涼太さんは、ジャッキー先生のお世話でようやくの就職先の取締役だつた。おやさしい涼太さんは、弱い立場の人の理解者であり、味方でもあつた。私

としては、コマーシャル原稿等の手伝いをさせてもらつた  
りして何かとお世話になつた……。

涼太さんとの離別を決めて、ジャッキー先生は大いに涙  
をながし、怒り、果てはゲラゲラ笑つてしまつたのだつた  
……。ゲラゲラゲラ。

徳島の取材からお帰りになつて、同行された大井上光晴

先生のことを話題にされた。えッ！ 恐れながら、あの狼煙・  
の人！ 文学伝習所の。文学者として、男性として、超人氣  
の作家。特に若者達に。

「万事にいろはす、一切を捨離して孤独なるを死すると

いふなり」

「生ぜしもひとりなり、死するも独りなり。されば、人  
と共に住するも独りなり、そいはつべき故なり」

一遍上人

語録

第十六回国民文化祭ぐんま二〇〇一年「生命の発見」で、

「書くことは生きること——わくわく自分史フォーラム」  
を企画、開催した。全国、海外からもおよそ六百冊の生命  
の書、自分史が寄せられた。

古稀の旅 法臘二十 宴まどか

寂聴

「いつ寂聴先生は仕事をなさるのか。不思議に思う。さ  
して大きくも強そうでもない、あの軀で——作家的消化力  
のすごさといい、仏教的燃焼のすさまじさといい——不思  
議といわざになんといえるのなや。寂聴先生は、夜な夜な  
寂庵をぬけだして比叡なる天台の谷へともぐりこみ、六根  
清淨のボレロにのつて、ペンをはしらせてはいるとわたしは  
思つてしまふ」

（寂庵だより 榊 莫山）

富士正晴（徳島県 山城町出身 一九一三一八七）全国

同人雑誌賞、第一回が平成十二年十一月徳島県山城町で  
あつた。選考委員をされた寂聴先生、ジャッキー先生は「地  
方は健在なり、この賞が長く続くことを祈ります」と歓迎  
のことばをのべておられる。現地、写真があつた。

文藝同人誌、わが「伊勢崎文学」（昭和五十三年発行）  
も応募した。

……。

ジャッキー先生に、私が企画した自分史——国民文化祭のお便りをした……。

ジャッキー先生と仲のよかつた狐狸庵先生、遠藤周作が徳島を訪ねた折、"晴美せんべい"だか、"まんじゅう"だか売つていたというおハナシ? うそかほんとか、ほんとかうそか。某週刊誌で。

いつだつたか、三島由紀夫の短編、「煙草」が話題になつた。ジャッキー先生が少女小説を書いていた頃のペンネーム、三谷晴美は三島由紀夫が特別の名付親だつた……。恐れながら、もしかして、ジャッキー先生が"小説"三島由紀夫、または"伝"を執筆されたら!……。天才が天才を書く……と思つたりして。

昭和四十五年十一月二十五日、東京、池袋のデパートで三島由紀夫展(書物の河 舞台の河 肉体の河 行動の河)を見た。

令和三年十一月九日、ジャッキー先生は、旅立たれた。

京都、嵯峨野「寂庵」——「偲ぶ会」にようやく参列  
が……。かなしい。かなしくて、かなしくて、きりもなく涙  
が……。どうすればいいのか……。